

◎ 連合会だより

日本経済の不況、構造的破綻の元凶は規制にありそれを取り除きさえすれば、景気がよくなり失業がなくなるという規制緩和の大合唱、しかしその先にあるのは現代アメリカの病理そのもの。富の集中がさらに促進し、中間層が没落し、貧困層が増大する。全米退職者協会のパーキンス氏も私たちの主張の人類の危機と協同組合原理にいたく共感されていた。そして、50歳に到達したベビーブーマー世代の生活と生き方、AARPへの参加の仕方が、アメリカの未来にとって重要な意味をもつこと、したがって日本の団塊の世代の動向に非常に関心を寄せていました。

97年は、社会構造の全般を勝者総取り型に転換するのか、生命、人権を市民自身の手で守りきるのか、戦後50年の総決算と21世紀への未来社会の根本的あり方を問う年になる。ここ数年でその根幹が定まるだろう。労働者協同組合としては、競争セクターに対し、新しい福祉社会の創造という

ことを対抗軸に、人間らしく働ける労働、高齢者がいきいきと生きられる地域社会、総合的地域福祉の創造に挑戦する。

年末、庄内産直センター（山形）と大矢野有機農産物供給センター（熊本）が連合会に加盟した。長崎の吾妻の有機農業にとりくむグループも加盟に積極的になってきている。仙台の協同集会では、仙台市で活動している80近い団体が参加をし、集会以降、労協への参加や協同での仕事づくりがすでに始まっている。

競争セクターにたいする対抗軸、労働者協同組合の使命、念願の内橋克人氏との紙上討論で氏がもっとも強調された点がこの点だった。井上ひさし氏の仙台での講演の、多面体としての人間、宮沢賢治が求めた協同とともに、新たな応援団のエネルギーに励まされ97年の年は明ける。

鍛谷 宗孝（労協連合会・専務理事）

◎ センター事業団だより

今年（1996）は2年越しの激動・流動の年だった。どちらかと言えば明より暗、上昇より下降、安心より不安と言ったマイナスのイメージが多勢のようだ。でも、そんな中で光る・輝く自分なりの宝のような出来事は、今気づかなくても、きっと存在しているはずだ。真っ暗で急降下で押しつぶされそうな不安の中に存在したとしても、それ自身が生きている感覚の証であり、それを良しとしない抵抗や挑戦の意欲の源であり、人間そのものの自覚の一つになり得るからだ。

センター事業団も「本当の協同組合」としての岐路を自覚した1年だった。事業的には初の前年割れで推移しており、経営の内実と共に「我々の行う事業とは何か」を、分野や内容の問題として意識づけていかなければならなくなってきた。組織も事業活動が旺盛になり、それを支える主体をどう描くか、またそのための仕組みやあり方、つまり本当の「協同組合らしい」運営とは何か、

真剣に語られ始めた。いずれにしても「自己改革」を全てにわたって貫く決意が必要だということだ。その中で新しい「仕事おこし」と組織はつくられていく。

新しい水準と新しい舞台が見えた東北での協同集会。個人的には、準備も含め出会った人たちとは、これまでの「組織を背負って…」と言うより、まさしく「個人」としての出会いを感じ、今後もつきあっていけると思っている。今問われているのは、「組織をどうするか」と共に、これを彩る1人1人、つまり「個人」としての自分をどう光輝かせるか、ということではないか。その為の「自分」へのこだわり・理想・現実への欲求を高める事抜きに、「変化・変革」はないだろう。これが個と組織、個と社会の関係ではないか。この文が会員各位の目に触れる頃はもう1997年。「変化・変革」の彩りの豊かな年に希望を膨らませよう。

古村 伸宏（労協センター事業団・事務局長）